

# 教師の「教師生活」に対する不安と悩み

## —教職経験年数別と年代別との比較分析を基軸として—

宮脇龍介 諏訪きぬ 東田幸子 齋藤政子 岡本富郎 樋田明  
石田健太郎 垣内国光 小野寺文子 岩木晃範 石原由美子

はじめに

教師や保育者がキャリアを積んでいく過程で、「経験年数」が重要な要因であることは論をまたない<sup>1)</sup>が、教師の生活歴の根底をなす「年代」はどのような位置を占めるのだろうか。一般的な教師・保育者のキャリア形成段階では、「中堅」とされる30代も、「家庭」という視点を介在させれば、山崎準二が指摘するように、ライフコースの分岐・交差のあり様が、男性教師・女性教師では大きく異なってくる。「共働きが多い」といわれている教師の世界でも、女性教師の場合には、出産・育児によって「子どもを見る目」や「親の願い」を感じる力量が身につく反面、「主任」等への職場役割からは外され、研究や研修機会からも遠のくことになる場合が多い。その結果、女性教師が「職業を継続した」場合でも、管理職期になって、管理職として新たな力量形成の機会を得られるケースは男性教師と比較してきわめて少ないという<sup>2)</sup>。

明星大学保育者教師キャリア研究会では、2008年度の明星大学特別研究費を得て「保育者のキャリア形成に関する調査」に取り組むことになった。その際、「教師の生活と意識調査」結果を、「経験年数」のみを変数として分析し、40代50代を一括りにしたことについて、その当否が議論となった<sup>3)</sup>。言い換えれば、「年代」をどうキャリア形成をみる視点とするか、ということである。そこから2005年に実施した明星大学を卒業して教師になった人々を対象とした「教師の生活と意識調査」の結果を再分析し、改めて「年代」別にキャリア形成の実態と課題を明らかにすることにした。

### 1. 研究の目的

齋藤論文では、教職経験年数：A.1～5年 B.6～10年 C.11～20年 D.21年以上を変数として、教師生活に対する不安や悩みの分析を行っていたが、教師のキャリア形成の過程を明らかにする上で、40代と50代を分割する意義があるのではないかと考えたからである。

齋藤論文においては、「経験年数」21年以上（年代とすれば40・50代）で何らかの悩みを有するものは78.2%、他の経験年数と比較してとりわけ高い比率を示す因子は無いが、5因子の中で相対的に高い比率を示したものが「因子3. 教職への失望感」と「因子4. 教師の家庭生活への困難感」であることが明らかにされている。

本研究は、上記の悩みや不安に関する項目について、年齢層との関連の視点からデータ表の基底に内在する情報を探索的に検討することを目的とする。その検討過程を通して、40代と50代の教師のもつ「不安と悩み」の特質を描き出したいと考える。

## 2. 研究の方法

### 1) 分析対象

「教師の悩みの実態とその要因」(齊藤他, 2007)において分析された因子分析(主因子法, バリマックス回転)結果から, 因子得点1から因子得点5までの5個の因子得点を分析対象とした<sup>4)</sup>。分析の対象となったNは291名であった。

### 2) 分析用コンピュータ・プログラム

統計分析用のSPSS 15.0J for Windowsを用いて, 一元配置分散分析により5個の因子得点間の年代別「平均値の比較」を行った。欠損値の処理はリストごとに除外され, Nは289名であった。平均値の比較後, 有意差のみられた因子得点について年代ごとの多重比較が行われた。

## 3. 研究の結果

### 1) 因子得点の年代別分析結果

教師生活に対する不安や悩みに関して, 因子得点を年代別に分析した結果, 年代間の因子得点に統計的な有意差が認められたのは, 因子得点1 ( $p=.022$ ) および因子得点2 ( $p=.018$ ) そして因子得点4 ( $p=.000$ ) であった。因子得点1は職務上の困難感を, 2は多忙感, 3は教職への失望感, 4は家庭生活上の悩み, 5は理想への期待と現実への不満感をそれぞれ表すものと考えられる。因子得点の年代別平均値等の記述統計量を表1に示す。

表1 因子得点の年代別記述統計

	世代別	度数	平均値	標準偏差
因子得点1 職務上の困難感	1 20代	45	.282	1.029
	2 30代	84	.101	.806
	3 40代	106	-.061	.846
	4 50歳以上	54	-.230	.937
因子得点2 多忙感	1 20代	45	-.126	.997
	2 30代	84	.197	.850
	3 40代	106	.044	.762
	4 50歳以上	54	-.244	.875
因子得点3 教職への失望感	1 20代	45	-.091	.762
	2 30代	84	-.064	.849
	3 40代	106	.039	.866
	4 50歳以上	54	.073	.871
因子得点4 家庭生活上の悩み	1 20代	45	-.654	.574
	2 30代	84	.007	.770
	3 40代	106	.128	.837
	4 50歳以上	54	.289	.845
因子得点5 理想への期待と 現実への失望感	1 20代	45	-.133	.795
	2 30代	84	.047	.840
	3 40代	106	.036	.786
	4 50歳以上	54	-.026	.652

N=289

## 2) 年代別にみる不安と悩みの特徴

統計的有意差のみられた因子得点について、年代ごとの多重比較を行った結果、複数の指標<sup>5)</sup>により有意差(5%水準)ありと認められたのは、まず因子得点1における20代と50以上の群間の平均値の差であり、ついで因子得点2における30代と50歳以上の間において、因子得点4における20代と他の3つの年代間の平均値の差においてであった。これらの人数の分布については、因子得点を平均以下( $\leq 0$ )と平均以上( $> 0$ )のlowとhighの2群に分けて4つの年代とのクロス集計表を作成したが、このうち上記因子得点1, 2, 4に焦点をあわせたものを表2に示す。

これらの結果からみると、職務上の困難感においては、20代は50以上の群に比べて有意に高く、また多忙感においては30代が50以上の群に比べて有意に高い。逆に家庭生活上の悩みにおいては、20代が他の3つの年代群に比べて有意に低かった。また、40代と50代を比較すると、平均値の多重比較では複数指標による統計的有意差はみられなかったものの、多忙感においてlow群では40代のほうが10ポイントほど少なく、high群では逆に40代のほうが10ポイントほど多い結果となっている。しかし、家庭生活上の悩みでは、多忙感とは逆にlow群で40代のほうが9ポイントほど多く、high群では反対に9ポイントほど少なかった。これらの悩みとは異なり、職務上の困難感では、40代も50以上の世代とともにhigh群よりもlow群のほうが11ポイントほど多かったなどの特徴が見られる。40代は50以上の年代に比べると多忙感に悩まされ、50以上の世代は40代と

表2 因子得点と年代とのクロス表

			年齢				合計
			1 20代	2 30代	3 40代	4 50歳以上	
因子得点 1 職務上の 困難感	1 low	度数	14	39	59	30	142
		%	31.1%	46.4%	55.7%	55.6%	49.1%
	2 high	度数	31	45	47	24	147
		%	68.9%	53.6%	44.3%	44.4%	50.9%
合計		度数	45	84	106	54	289
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
因子得点 2 多忙感	1 low	度数	21	32	46	29	128
		%	46.7%	38.1%	43.4%	53.7%	44.3%
	2 high	度数	24	52	60	25	161
		%	53.3%	61.9%	56.6%	46.3%	55.7%
合計		度数	45	84	106	54	289
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
因子得点 4 家庭生活 上の悩み	1 low	度数	40	49	55	23	167
		%	88.9%	58.3%	51.9%	42.6%	57.8%
	2 high	度数	5	35	51	31	122
		%	11.1%	41.7%	48.1%	57.4%	42.2%
合計		度数	45	84	106	54	289
		%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

比べると家庭生活上の悩みに困惑する傾向にあるものの、職務上の困難感においては、どちらの世代においても減衰する傾向にあるように思われる。

#### 4. 「教育実践・校務遂行困難感」項目等のさらなる分析

第1因子の「教育実践・校務遂行困難感」は8項目からなり、この中の項目Lは第5因子（理想への期待と現実への不満感）においても.487と比較的高い因子負荷量を示していたが、これは「職場での人間関係がうまくいかない」というものであった。また項目V「コンピュータなど情報化の進展でストレスを感じる」は、最も高い因子負荷量が第4因子への.257、ついで第1因子への.241であって5つの因子中に含めては考察されなかった。そこでこれら8項目の中で、年代別に統計的有意差（5％水準）の見られたもの4項目に項目Vを加えた計5項目について、さらなる検討を加えることにした。

表3-1 コレスポンデンス分析プログラムへの入力データ (%)

問6.2 教師の生活についての不安や悩み	記号&評定	年齢 G 1 20代	年齢 G 2 30代	年齢 G 3 40代	年齢 G4 50歳以上
10) 学校の校務を上手く 遂行できない	J1	10.2	12.6	18.2	25.0
	J2	42.9	39.1	35.5	37.5
	J3	22.4	29.9	32.7	32.1
	J4	24.5	14.9	10.9	3.6
	J5	0.0	3.4	2.7	1.8
12) 職場での人間関係 がうまくいかない	L1	38.8	28.4	35.5	28.1
	L2	36.7	37.5	35.5	35.1
	L3	6.1	23.9	17.3	24.6
	L4	18.4	10.2	9.1	8.8
	L5	0.0	0.0	2.7	3.5
14) 教材研究がうまく いかない	N1	14.3	23.9	24.5	26.8
	N2	30.6	28.4	42.7	41.1
	N3	20.4	25.0	20.9	19.6
	N4	28.6	17.0	9.1	12.5
	N5	6.1	5.7	2.7	0.0
22) コンピュータなど情報 化の進展にストレスを 感じる	V1	42.9	24.4	13.6	15.8
	V2	34.7	31.4	29.1	17.5
	V3	12.2	27.9	24.5	28.1
	V4	8.2	10.5	21.8	31.6
	V5	2.0	5.8	10.9	7.0
25) 何とかしなければと 思っても現実にその 対処法がわからない	Y1	17.0	9.4	10.9	19.3
	Y2	14.9	21.2	29.1	33.3
	Y3	23.4	44.7	30.9	29.8
	Y4	27.7	17.6	20.9	14.0
	Y5	17.0	7.1	8.2	3.5

### 1) 分析対象

分析対象とするデータセットは、教師の悩みや不安に関するアンケートへの回答者を4つの年齢層にわけて5つの項目への1から5までの評定によるクロス集計表である。

横に年齢層4、縦に項目5×評定5をとり、列側を4、行側を5×5ののべ25とする2元表であるが、これを表3-1に示した。表内の数値は、各年齢層の合計人数を100としたときの相対度数(%)である。表3-2はその項目ごとの年齢層別合計人数である。入力データ行列は、相対度数(%)を要素とする25×4の行列である。

### 2) 分析用コンピュータ・プログラム

分析用プログラムとしてはスタティスティカのコレスボンデンス分析モジュールを用いた。上記データセットをこのプログラムに入力・解析し、計算結果を得た。この分析法は、記述的多変量解析法として位置づけられており、行と列からなるデータ集合の最良の同時布置を見いだす方法であり、クロス分類表の分析に最も適していると考えられているものである(大隅,1994)<sup>6)</sup>。

### 3) 結果および考察

プログラムによる計算結果から「全次元についての固有値と変動」についての出力をみると表4に示すように、特異値、固有値、%変動、累積%, カイ2乗が3つの次元についてえられる。他にも全変動(inertia), 自由度, p値が出力される。特異値は列カテゴリと行カテゴリとの相関をあらわす値であり、特異値の2乗が固有値で、変動と等しい値である。

表3-2 項目ごとの年齢層別合計人数

次元数	年齢 G1 20 代	年齢 G2 30 代	年齢 G3 40 代	年齢 G4 50 歳以上	合計
10) J	49	87	110	56	302
12) L	49	88	110	57	304
14) N	49	88	110	56	303
22) V	49	86	110	57	302
25) Y	47	85	110	57	299

(人)

表4 全次元についての固有値と変動

次元数	特異値	固有値	%変動	累積%	カイ2乗
1	0.266	0.071	76.6	76.6	141.034
2	0.123	0.015	16.5	93.1	30.465
3	0.080	0.006	6.9	100.0	12.691
計	—	0.092	100.0	—	184.190

全変動 = .092  $\chi^2=184.190$  df=72 p=0.0000

この表を見ると次元1の変動が全変動の76.6%を説明しており、もとのデータに内在する情報（あるいはカテゴリ間の根底にある関係性）のほとんどを荷っているようである。次元2までの累積%をみると93.1%となっており、全変動の9割以上が説明されているので、2次元解について検討していく。この2次元解の出力を表5に示す。ここで質量は、入力表の値の和が1.0になるように、すべての要素を入力表の全合計で割った値であり、列要素の影響を示す測度になっている。この表では次元1の変動が全変動の76.6%を説明している。質は2次元解で説明されている列についてのカイ2乗の割合を表している。年齢G3の55%以外は、3つのカテゴリとも90%～100%が説明されている。つぎに、変動は入力表のカイ2乗統計量の合計を入力表の総和で割った値である。相対変動は各ポイントによって説明される全変動の比率を表しており、年齢G1の場合、全変動への寄与が49%となっている。

表5 列の座標と変動への寄与率

列名	座標 次元1	座標 次元2	質量	質	相対 変動	変動 次元1	Cos^2 次元1	変動 次元2	Cos^2 次元2
年齢 G 1 20代	0.414	- 0.092	0.250	1.000	0.489	0.608	0.953	0.139	0.047
年齢 G 2 30代	0.028	0.203	0.250	0.959	0.119	0.003	0.018	0.676	0.940
年齢 G 3 40代	- 0.144	- 0.005	0.250	0.548	0.103	0.074	0.548	0.000	0.001
年齢 G 4 50歳以上	- 0.298	- 0.106	0.250	0.940	0.289	0.315	0.835	0.185	0.106

規準化：行と列のプロフィール

#### ① 5 項目の年齢別布置

次元1で説明された変動への相対的な寄与については、年齢G1が61%，年齢G4が32%となっており、この2つの群で90%以上を占めており、年齢G3は7%にすぎない。年齢G2は0%に近い。ついで次元2では、年齢G2の群が68%とひとつだけ高く、年齢G4が19%，年齢G1が14%となっている。年齢G3は0%である。またコサイン2乗は各次元によってあらわされる各列カテゴリに対する質である。次元1と次元2に対するコサイン2乗の和は質と等しい値であり、例えば年齢G1の場合2つの次元でその変動を100%説明している。

行側のカテゴリに対しても同様の数値が得られる。行名は、質問項目に割り振ったアルファベットと回答の評定値（1～5）をセットにしている。表5に示した列側の数値と行側の数値の次元1と次元2の座標値を用いて、次元1を水平軸に次元2を垂直軸にとり、同時布置図として示したのが図1である。列カテゴリを+で、行カテゴリを○で示している。図では、列カテゴリが右から左にかけて年齢層順に順序良く付置されている。

項目Nと項目Yでは5「とてもあてはまる」と4「ややあてはまる」とが原点を中心にして右側に位置していた。項目J, L, Vに関しては特に項目ごとの散布図としても図2-1から2-3として示した。各項目への回答のうち、5「とてもあてはまる」と4「や

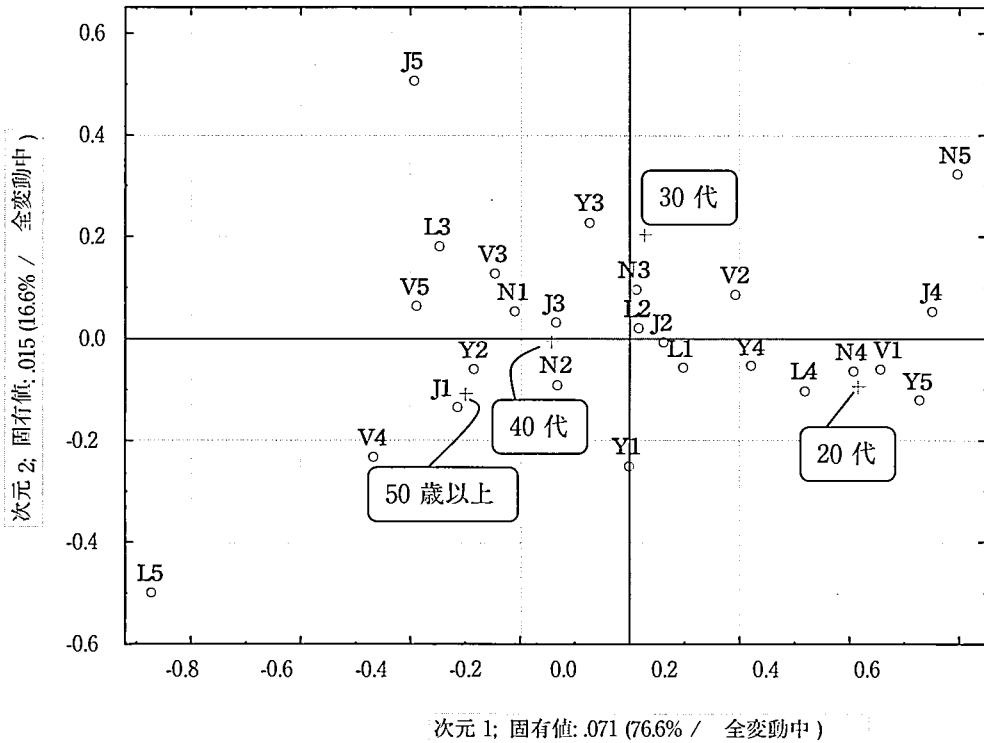


図1 次元1と次元2による列カテゴリと行カテゴリの同時布置図

## ②項目Jの年代別特徴

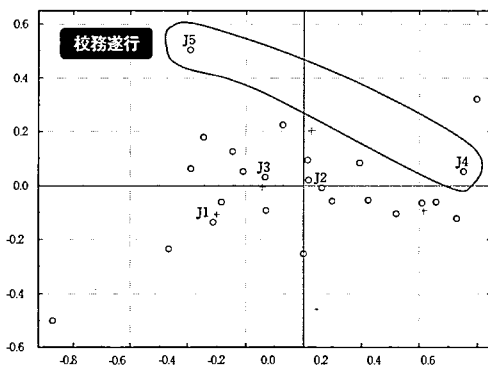


図2-1 項目J 校務遂行

やあてはまる」とが曲線で囲んである。この肯定的回答は、項目Jと項目Lとでは、それぞれ水平軸の上側と下側に位置していた。項目Vの場合は原点を中心にして左側に位置していた。

図の原点を中心にして右側は20代の回答者群の特徴を反映していると考えられ、項目N「教材研究がうまくいかない」や項目Y「何とかしなければと思っても現実に対応法がわからない」がそれである。それらは主に、20代の教職に就いている人たちの悩みと考えられよう。

項目J「学校の校務を上手く遂行できない」では、水平軸の上部に肯定的回答が位置しているが、これは20代から30代の回答者の領域である。30代になっても校務の遂行はなかなか難しいことのようなのである。これら若い世代の教師たちにとっては、身近な指導をしてもらえる信頼のおける先輩教師とのコミュニケーションが、悩みや問題を乗り越えていくための有力な拠り所である。したがって職場内における教職員間の関係性を問わねば

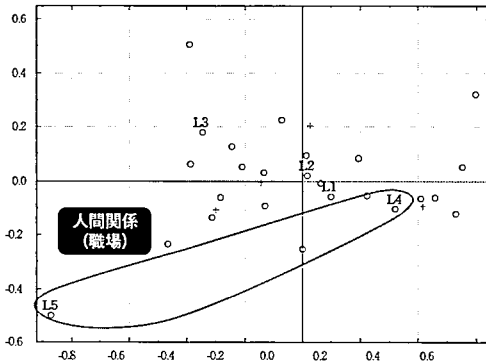


図2-2 項目L 人間関係 (職場)

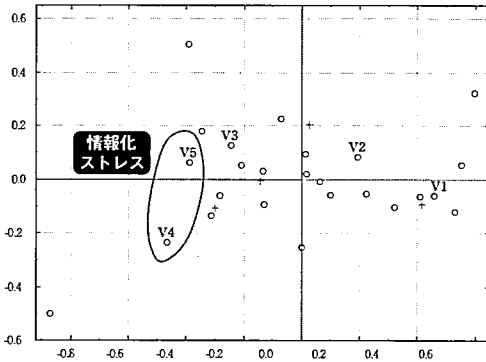


図2-3 項目V 情報化 (ストレス)

ならないのではないだろうか。また新たな解決策を見出していく際にも、貴重なベースとして見落とせない問題と思われる。

### ②項目Lの年代別特徴

項目L「職場での人間関係がうまくいかない」は、水平軸の下部に肯定的回答が位置し、ここは20代と50歳以上の世代の領域である。回答は20代のほうに4「ややあてはまる」があり、50歳以上の世代のほうに5「とてもあてはまる」がきている。たとえば50歳以上では校長職や副校長職にある人も多いであろうし、20歳代の若手教師を監督・指導する役割を果たすことを職務上求められもし、また期待されもするだろう。その際、監督・指導を素直に若手教師が受け入れてくれさえすれば「職場での人間関係がうまくいかない」といった設問に「とてもあてはまる」などといった回答は出てこないのではないかといったことも考えられる。校長職や副校長職といった役職者に限らず20歳以上も年の離れた世代が、若手教師らと円滑な意思疎通をはかっていくためのスキルの充実化をどのように図っていくかが問われている

ようである。最近開発されたELIN (Emotional Labor Inventory for Nurses)<sup>7)</sup>における第1因子の「探索的理解」のような視点をコミュニケーションに導入することも有用な手立てとなりはしないであろうか<sup>8)</sup>。

### ③項目Vの年代別特徴

項目V「コンピュータなど情報化の進展にストレスを感じる」は、肯定的な回答が図の原点の左側に位置し、40代や50歳以上の世代の領域にある。IT化の職場浸透によって得手不得手にかかわらずコンピューターリテラシーが求められるようになり、基本ソフトやワープロ、表計算ソフトのメーカーによる一方的な改変に適応していかざるを得ない状況にある。情報機器の新しい局面に対し、40代、50代の教師は、若い世代の教師のようにスムーズに馴染んでいきにくくなっているのではないかと推測される。適応力の高い若い世代と短時間でも時間を共にし、語らいながら操作法についても横についてみて覚えるというやり方も案外有用ではないだろうか。具体的に明確な目的のある話題ならば世代間を超えてコミュニケーションを活性化することの一助になることもあり、また、苦手な人にとっても新しい操作技術の習得にもつながるのではないかとと思われる。



## 5. 課題と展望

本研究における因子分析は、各因子間は無相関であるというモデルのもとにすすめられた。それに対して感情労働測定に関する研究の ELIN や D-QEL (Dutch Questionnaire on Emotional) <sup>9)</sup> においては、考察された各因子は相関があることを想定して分析がなされている。そのことから、もし相関がないようならば係数に反映されるので相関を想定した分析法を採用し、因子間にも相関がみられるようならば年代別の因子構造の相違などを見出すべく研究をすすめていったらいいのではないかと考える。最近の分析用プログラム <sup>10)</sup> では、理論モデルとデータとの適合度をあらわす複数個の指標が出力されるようになっていたので、相関のある因子分析モデルの検討も客観的に行われるであろう。

### <注>

- <sup>1)</sup> 山崎準二は、教職に就いて以降の段階を、①新任期：リアリティ・ショックからアイデンティティの確立へ、②中堅期：ライフコースの分岐と交差（教職生活 10 年以降、30 歳代から 40 歳中ごろまで）、③管理職期：実践家からの離脱化と管理職としての新たな実践創造 とに区分している（『教師のライフコース研究』創風社 2002 pp.335-350）。教師の力量の発達には、単に教師としての職場生活、教育実践の経験だけでなく、地域・社会・家庭、や社会・政治情勢・教育政策等多様な要因が複合的に働いていることを「教師のライフコース研究」において明らかにしようとしている。しかし、現職教育、職能指導や保育者研修に関する研究や研修体制を組むような際には、キャリア形成の段階を、職業生活のステップとして「経験年数」で区分する方法が取られていることが多い（保正友子、鈴木真理子、竹沢昌子『キャリアを紡ぐソーシャルワーカー』筒井書房 2006、高橋真由美「幼稚園教師のキャリア形成」諏訪きぬ編著『幼稚園実習ガイドブック』pp.144-148 新読書社 2009 他）
- <sup>2)</sup> 山崎前掲書 p.36, pp.340-342
- <sup>3)</sup> 齋藤政子他「教師の悩みの実態とその要因」明星大学人文学部研究紀要第 43 号 2007
- <sup>4)</sup> 各回答者について因子負荷量から回帰法により真の因子得点の推定値が算出された。
- <sup>5)</sup> Bonferroni の方法、LSD、Scheffe の方法により算出し指標として用いた。
- <sup>6)</sup> 大隈 昇 他『記述的多変量解析法』日科技連 1994
- <sup>7)</sup> 片山由加里 他「看護師の感情労働測定尺度の開発」日本看護科学会誌 25 巻 2 号 2005
- <sup>8)</sup> 「看護師」の感情労働の測定が可能ならば、出産や子育てを経験した女性教師が持つようになる「子どもを見る目」や「親の願い」を感じる力量をも測定するいわば感情労働測定尺度「教師版」もその開発が期待される場所である。そうすれば、これらもひとつのキャリア形成として評価可能となるのではないだろうか。
- <sup>9)</sup> Näring, G., Briët, M., & Brouwers, A. (2007). Validation of the Dutch Questionnaire on Emotional Labor (D-QEL) in Nurses and Teachers. In P. Richter, J. M. Peiro & W. B. Schaufeli (Eds.), Psychosocial resources in human services work (pp. 135-145). München: Hampp Publishers  
[http://dspace.ou.nl/bitstream/1820/1294/1/N % C3 % A4ring % 20-Bri % C3 % ABt-](http://dspace.ou.nl/bitstream/1820/1294/1/N%20-%20Bri%20-%20ABt)

Brouwers-D-QEL-Validation-2007.PDF

- <sup>10)</sup> Amos や Lisrel, EQS などのデータ解析プログラムでは, RMSEA や GFI, AGFI, NFI などの適合度指標が出力されモデルとデータとの当てはまりの良さの程度が評価される。

#### <参考文献>

- 安達智子「女子学生のキャリア意識」心理学研究第 79 巻 1 号 日本心理学会 2008
- 狩野 裕「構造方程式モデリングは, 因子分析, 分散分析, パス解析のすべてにとって代わるのか?」行動計量学 Vol.29, No.2 日本行動計量学会 2002
- 芝 祐順『因子分析法第 2 版』東京大学出版会 1981
- 西坂 小百合他「幼稚園教師のストレスと精神的健康に及ぼすハーディネス, ソーシャルサポート, コーピング・スタイルの影響」東京学芸大学紀要 1 部門第 55 集 2004
- 西里 静彦『質的データの数量化』朝倉書店 1982
- 林 知己夫『数量化』朝倉書店 1993
- 山岡和枝 他『医療と社会の計量学』朝倉書店 1994
- 柳井晴夫・高木廣文 編『多変量解析ハンドブック』現代数学社 1986
- 柳井晴夫『多変量データ解析法』朝倉書店 1994
- 「対応分析 (コレスポンデンス アナリシス)」 STATISTICA Electronic Manual 2003
- 'Correspondence Analysis' "The Electronic Statistics Textbook" The Statistics Homepage <http://www.statsoft.com/textbook/stcoran.html>